

(5)、考察など

1985年9月(1985年度だけは9月より86年3月まで、他は4月~3月、ただし08年度は8月まで)よりの総掲載回数は726回でした。ということは期間は23年間弱ですから、1年間にはどれかの新聞に合計31回強掲載されていることになります。(726÷23=31.56)

この内地元S紙には1カ月に1回以上(286÷23=12.4)掲載されています。

これは貼り出した模造紙のあまりにも多さに仰天したことに加えての「すげえ」との感想に尽きますね。誠に凄—いことで、よくぞかくも多く報道して下さったと有り難くなりまし、ここにTVやラジオや雑誌など、さらに有線放送も加わるので、高校生のマツシロの取り組みは、確実に県民に広く知れ渡っているのです。

ところで学園祭まで頑張った生徒の感想のうち主だったものを紹介します。

新聞記事を貼るのをやってみて本当に大変だった。切り抜かれた記事の余白を切り落とし、糊をつけて模造紙に貼る。そんな単調な作業だったけれど、自分が生まれる前から班の先輩方が行ってきた活動の歴史がこの新聞記事に込められていると思うと、24年間の歴史の重みを感じました。

1年 小林

高校最後の文化祭の準備で新聞記事の貼り付けを行った。24年分の膨大な数だ。先輩方が載っている記事を見て思ったことは、これから先輩方が築き上げた伝統を守っていかなければならない、また自分たちも何かしなくてはならないということです。

あと5カ月で僕はこの学校を卒業しますが、残り少ない郷土研の活動で何かを残していきたいです。

3年 小山

僕は今回の新聞記事の記事を貼り付ける作業をしてみて、「昔の松代大本營の見方は今の見方とまったく別のものだった」ということに気が付きました。そして大本營を昔の印象から今の印象に変えたのは、郷土研究班の活動のおかげではないかということも分かりました。それを知った僕は、自分もそんなすばらしい活動に参加しているので、その郷土研究班にドロを塗らないような取り組みをしたいと、改めて思いました。

2年 朝妻

各年代の記事の切り抜きを模造紙に貼っていく作業をやってみての感想は、間違えないように貼ることは当然ですが、特に貼り方に注意しました。つまり見やすく、見栄え良く貼るということを学びました。あと作業をする時に、何らかの作業を先生や先輩から与えられるのを待つのではなくて、自分で何をやるべきかよく考えて行動していくということを次からは取り入れていきたいです。

まだ1年ですけど、今自分ができることを進んでやりたいです。

1年 上松

新聞記事を貼るのをやってみて本当に大変だった。切り抜かれた記事の余白を切り落とし、糊をつけて模造紙に貼る。そんな単調な作業だったけれど、自分が生まれる前から班の先輩方が行ってきた活動の歴史がこの新聞記事に込められていると思うと、24年間の歴史の重みを感じました。

1年 小林

総じて新聞(記事)が身近になったし、『先輩の活動によってマツシロの見方を変えて来

た』ということが確かめられたようでした。

(6)、足りなかったこと、今後への展望

ただしN I Eで高めたい力②、③については多くの生徒のものにはならなかったようです。

振り返って見るに、高校生のマツシロへの取り組みは教育の場であるが故に地道でかつ地域の雰囲気を損ねないように心配りしてきました。これに対して、運動団体の取り組みはセンセーショナル（もしくは糾弾的）な点も見受けられましたから、その取り組みの参加者はかなり少ないのに大変大きく報道して、逆に高校生のことは報道しないかごく小さく扱ったことが何回もあったと記憶しています。しかしそれらのことをつぶさに検証する営みは次年度より模造紙44枚を丁寧に辿り進めようと思います。

またマツシロの見方を変えて来た例は以下に紹介する社説をご覧いただければ明らかなのですが、それらのことを生徒自身の討論などで深めることもやはり次年度となるでしょう。

「（前略）大本営跡は（中略）朝鮮人強制連行を象徴する史跡である（後略）」

――1990年7月23日信毎社説『近代史を見つめ直す夏に』より――

「（前略）松代地下壕（中略）いわば今日本の加害責任の象徴として存在する（後略）」

――1996年8月15日信毎社説『誓い新たに51年目 21世紀へ』より――

↓

「（前略）班長の石原さんは、松代を『加害の地』としてのみとらえてはいない。例えば、朝鮮人労働者と地元の人達との交流もあったことを知り、『戦争遺跡の見方は決して一つではない』と考えるようになったという。（後略）」

――2005年8月15日信毎社説「『なぜ』を問うことから」より――

今年は善光寺のご開帳で見学者はさらに増えるでしょうから、新たな取り組みとしてその見学者に生徒がまず自らで作った「（仮称）大本営新聞」を手渡し、そして説明を始めることを期待・想像して報告を閉じます。

授業には、天皇陛下の御姿とは、一掃を
観るに事業を請ふ。すべしと
とを教へる。(一九三五年刊)と
ある。戦と教の深いかかわりを
示す史料である。中々、高校の授業
でも生かされたことになる。

視野を広く持つて

長野市で長野県高校校郷土研究
班は松代に本営地壕(ごう)の調
査を続けてきた。

大戦末期、本決戦(備へて揃つ
れた)地壕で、天皇陛下御所
島から通達行かれた。や自主統
の労働者数千人規模動員された
といわれる。

現在語をていす。雇ふ男
が、生徒たちにも、在日の労働
者や兵士のたちから募ら
れ、開き取、調査を続けてきた。いま
は生徒たちは、県内外へ訪れず
学生や高校生にたがひ役もつ
つと。

班の石原さんには、松代でみ
連の「加の地」としてとみ
えていない。例えば、朝鮮労働
者地元の人たちの交流もつ
ことを知り、「戦争時の見はつ
てつてはいい」とおぼえる。つ
なご。

一個調査を押しつけるのでは
事案調べる。と生徒は自身
考へる。「東洋の方針は、教
育の場の歴史研究の仕方につ
て」と。

最近にもつとつと、つと
せ、なごある。次の世代、次
時代、引き継ぐ。次は時代、と
常々をえる。とだ。

先戦争、つとつと、つとつと
史観の分類が深刻になつて
難い。作業が、歴史をつつと
共有を断つ。戦争本義の。
八十五年、戦争本義の。
を種々、身近な話を訪ねみ
々々、なごある。と、どの
々に、つとつと、つとつと、つ
つと。